

平成 30 年 6 月 18 日現在

機関番号：15501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02981

研究課題名(和文) 日本における近世～近代の大型陶器製作技術と系譜に関する考古学的研究

研究課題名(英文) Archaeological Study on large-scale Pottery Making Technology and Genealogy in Early Modern-Modern Times in Japan

研究代表者

田畑 直彦 (TABATA, Naohiko)

山口大学・大学情報機構・助教

研究者番号：20284234

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、唐津焼、薩摩焼、壺屋焼、石見焼、堀越焼について聞き取り調査、遺物・製品の観察を行い、技術的特徴・系譜を整理した。このうち、朝鮮系に由来する唐津焼、薩摩焼、壺屋焼には共通点と相違点があり、特に壺屋焼は独自の特徴を持つことを明らかにした。石見焼においては、その成形技術には複数の系譜があること、山陽小野田において登窯を改良していたことを明らかにした。堀越焼においては、登窯の測量調査を行い、その構造が常滑焼に由来することを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In this study, interview survey and observation of artifacts and products were conducted on Karatsu ware, Satsuma ware, Tsuboya ware, Iwami ware, Horikoshi ware and technical characteristics and genealogies were arranged. Among these, there were common points and differences in the Karatsu ware, Satsuma ware and Tsuboya ware varieties derived from Korean pottery. Especially, Tsuboya ware made it clear that it has its own characteristics. In Iwami ware, it was revealed that there were several genealogies in the molding technology, and that climbing kilns were improved in Sanyo-Onoda. In Horikoshi ware, we surveyed one climbing kiln, and found that its structure derives from Tokoname ware.

研究分野：日本考古学

キーワード：近世～近代 大型陶器

### 1. 研究開始当初の背景

4点の問題点を提示する。1点目は近世・近代の大型陶器製作技術と現在に至る具体的な系譜の検討が不十分であることである。2点目は大型陶器の産地において、その製作技術は消滅寸前の危機的状況にあることである。3点目は大型陶器について考古学・民俗学・文献研究者間で連携した研究がきわめて少ないことである。4点目は陶芸経験の少ない現代人が技法を理解するのに欠かせない映像があまり公開されていないことである。

### 2. 研究の目的

本研究では、近世～近代の日本の大型陶器(甕・壺)について、成形から焼成までの一連の製作技術を調査するとともに、考古資料・伝世品・現在の製品の観察を行う。そして、製作技術の特徴と系譜、歴史的な意義を考古学の視点から明らかにし、研究成果報告書を作成し、映像を公開する。以上により、近世・近代の陶器研究にとどまらず、須恵器大甕、弥生土器甕棺などの大型土器の製作技術や遺物を観察する上での新たな視点を構築するとともに、日本の近代化において伝統技術が果たした役割を再評価し、伝統技術の記録と継承に貢献することを目的とする。

### 3. 研究の方法

平成27年度から29年度にかけて、日本における近世～近代の大型陶器(唐津焼・薩摩焼・壺屋焼・石見焼・堀越焼)の製品、道具類、窯や成形から焼成に至る製作工程を調査し、陶工から聞き取り調査を行う。

### 4. 研究成果

#### (1) 唐津焼・薩摩焼・壺屋焼

論文「近世における壺・甕の製作技術 - 九州・沖縄を中心に -」『中近世陶磁器の考古学』第6巻で、製作技術の特徴・系譜を整理した。また、唐津焼(武雄系古唐津多々良焼・金子窯)、壺屋焼(荒焼・榮用窯)については、2010年に行った成形の模様の調査をとりまとめた報告書を作成した。このうち、朝鮮系に由来する唐津焼、薩摩焼、壺屋焼には共通点と相違点があり、特に壺屋焼は独自の特徴を持つことを明らかにした。

#### (2) 石見焼

現在の石見焼の甕「はんど」は轆轤成形であることが知られている。しかし、19世紀に製作されたと推測される大甕を観察した結果、内面に指による筋状の調整痕を持つことを確認した。同様の調整痕は越前焼や常滑焼に見られるもので、上記の甕が非轆轤(人間轆轤)成形によるものであることを明らかにした。また、その系譜について、従来伝承のある備前焼以外でも、非轆轤成形で甕を製作した事例(原村焼)を確認した。上記から、

具体的なルーツは不明であるが、非轆轤成形の甕は、中国地方のどこかに存在した粗陶器の製作技術によるものと推測した。現状で窯跡が未発見のため、今後の調査の進展が俟たれる。

現在の轆轤成形のルーツについては、轆轤の回転方向、甕の器形の近似性から、主に福岡県の上野・高取系陶器の影響と考えた。

上記の一部については、2016年の「石見国巡回講座」で公表した。また、同年開催の島根県立古代出雲歴史博物館の企画展「いわみもの」に情報・映像の提供を行った。

小野田(現山陽小野田)では、明治30年代から硫酸瓶生産にあたって、石見焼の陶工が多数赴いていたことが知られている。上記を含め、近代の山口県の窯業を語る上で、北村彌一郎による記録はきわめて重要であるが、これまで北村が記録した山口県の窯業について、考古学的な視点から検討した事例はほとんどなかった。

今回、北村の記録を検討した結果、小野田では大正初期に石見焼系の登窯を改良して縦狭間構造としていたことが判明した。また、文献等の調査の結果、明治末年頃に姫井伊介氏が窯の改良を試みており、1910年に同氏が登窯については登録実用新案、石炭窯については特許を取得していたことを明細書により確認し、その窯の構造を確認することができた。

上記については、2017年に山陽小野田市の講演会で公表した。

#### (3) 堀越焼ほか

堀越焼・賀谷窯跡について、写真測量による詳細な実測図を作成し、その構造が常滑焼に由来することを明らかにした。また、大正初期の北村彌一郎による記録と比較し、窯構造が変化していることを明らかにした。

北村彌一郎による記録に基づき、佐野焼、堀越焼・末田焼、小野田皿山の生産体制・生産コストの検討を行い、佐野焼 堀越焼・末田焼 小野田皿山の順で、生産規模が大きかったことを具体的に示した。

佐野焼においては、北村が記した井戸側の規格と佐野焼17号窯出土品を比較し、外径・高さの相関関係が上記の規格と概ね相関関係にあることを明らかにした。また、唯一発掘調査が行われた17号窯が北村によって記録されていたことなどを明らかにした。

上記については、2016年に山口考古学会で公表した。

#### (4) 土器を観察する上での新たな視点

特に重要な1点について述べる。

唐津焼(武雄系古唐津多々良焼・金子窯)の報告書作成中に、叩き締めの後、板状工具(「フィッテ」(ヘラ))で調整を行った後においても、外面に叩き面が亀甲状にみられることを確認し、一部の遺物においても、同様な痕跡を持つものを確認した。

近年、朝鮮半島の無文土器や早～前期の弥生土器においても叩き面が見られることが、指摘されている(武末 2013)。上記については、観察がやや困難なこともあり、評価を保留する研究者が多いが、唐津焼の事例を参考にすると、弥生土器においても同様な痕跡が残ることは十分考えられ、武末氏の視点を再評価し、検討を深める必要があるだろう。また、太い粘土紐の使用・外傾接合・叩き締め・ハケメ調整・覆い型野焼きが、朝鮮半島の無文土器において早い段階から体系的な製作技術として存在した可能性を含めて、今後の検討が期待される。

#### (5) おわりに

交付額に基づき、申請時の計画を縮小したが、対象地域における近世～近代の大型陶器について、新たな研究成果を生み出すことができた。諸般の事情により、映像の公開は石見焼のみにとどまったが、作成した唐津焼、壺屋焼の報告書では、成形技術の手順を詳細に記録できたことから、伝統技術の継承にも役立つことが期待される。以上から、研究の目的を概ね達成できたと考えている。

#### <引用文献>

武末純一 2013「タタキ技法はいつまでさかのぼるか - 弥生早・前期の甕を中心に」みずほ別冊『弥生研究の群像』、497-508

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

##### [雑誌論文](計1件)

田畑直彦、山口県の窯業と石見焼 - 佐野焼・堀越焼・末田焼・小野田皿山 -、島根県古代文化センター研究論集、査読無し、17、2017、pp.177-193

##### [学会発表](計4件)

田畑直彦、石見焼「はんど」の製作技術とそのルーツ、日本考古学協会第84回総会研究発表会、2018

田畑直彦、大正初期の皿山と硫酸瓶 - 北村弥一郎がみた小野田の窯業 -、山陽小野田市歴史民俗資料館 歴史講演会、2017

田畑直彦、堀越焼・賀谷窯跡の測量調査 平成28年度山口考古学会、2016

田畑直彦、石見焼「はんど」の製作技術と特徴～成形を中心に～、第8回 石見国巡回講座 浜田の石見焼 - 技術と誕生のなぞに迫る -、2016

##### [図書](計5件)

齋藤正憲・澤井計宏・進藤敏雄・久野旦央・

木立雅朗・佐々木誉斗・桜岡正信・久保田慎二・田中和彦・小泉龍人・渡辺芳郎・佐々木幹雄・徳澤啓一・余語琢磨・田畑幸嗣・馬場匡浩・小高敬寛・小林正史・田畑直彦、やきもの つくる・うごく・つかう 近代文藝社、2018、306

田畑直彦、壺屋焼(荒焼)榮用窯におけるトゥックイの成形技術 平成27～29年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C))による研究成果、2018、34

田畑直彦、武雄系古唐津多々良焼・金子窯における甕の成形技術 平成27～29年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C))による研究成果、2018、36

田畑直彦、堀越焼・賀谷窯跡測量調査報告書、平成27～29年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C))による研究成果、2018、37

佐々木達夫・李喜寛/池世梨訳・小林仁・陳殿・畑中英二・市川創・藤田邦雄・関明恵・小川望・小松隆史・田畑直彦・鄭銀珍・清水菜穂・齋藤正憲・雄山閣、中近世陶磁器の考古学第六巻、2017、335

#### [産業財産権]

##### 出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

##### 取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

#### [その他] ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

田畑 直彦 (TABATA, Naohiko)  
山口大学・大学情報機構・助教  
研究者番号：20284234

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3)連携研究者

( )

研究者番号：

(4)研究協力者

( )